

「^{あい}藍」 「^{りょう}涼」 「^{はな}華」と咲き誇る、 江戸川区の染色文化

四方八方、河川が流れる江戸川区では、かつて
染めた反物たんものの糊を落とす川晒しかわざらの風景が見られました。

豊かな清流を求め、染織工場せんしょくが次々に移転してきた区内には
染色せんしょくの文化が今でも息づいています。

伝統いしづえを礎に、それぞれの独創性を開花させた
染色家たちの優れた職人技を、貴重な作品とともに
本展示ではたっぷりご紹介します。

「藍」「涼」「華」と、1ヶ月毎に衣替えする
めくるめく江戸川区の染色の世界をご堪能ください。



「江戸川に癒され、 呼吸を整え入れる

「一筆一筆」 草薙恵子

友禪は格闘技です。草花といったモチーフをどう表現するか、柄の位置や大きさをどうするか、頭の中で格闘し、実際に体力も使います。年齢を重ねれば熟練の味が出るというけれど、体力や持久力がある時にしかできない作品もあるように思います。

高校卒業後、友禪に偶然出会い40数年。近年は日本伝統工芸展に出品する作品づくりを主に活動しています。モチーフは、庭に咲く四季折々の草花がほとんどです。土から栄養を吸い、花を咲かせる自然の植物には、底知れぬパワーを感じます。いずれは風や光といった目に見えない空気感を表現する作品を創りあげてみたいです。

創作に行き詰まった時は、江戸川のせせらぎを眺めリフレッシュし、呼吸を整え、手を動かします。この故郷の川に救われたことは幾度となくあります。



昭和 28 (1953) 年、江戸川区生まれ。大塚女子きもの学院友禪染色研究科卒業後、7年間の修業を経て、染色家としての道を歩み始める。平成5(1993)年江戸川区伝統工芸会入会。以後、江戸川区伝統工芸展奨励賞・区長賞・教育委員会賞・技能賞、日本工芸会東日本伝統工芸展入選など、受賞多数。目標は日本伝統工芸展の本展入賞。

のり 型付け(糊を置く)

①



型紙を張った木枠を白生地の上に被せる

②



型紙の上からヘラで糊を置く(糊が均等になるようにするのが職人技)
染めない(白く残す)部分に糊を置く

③

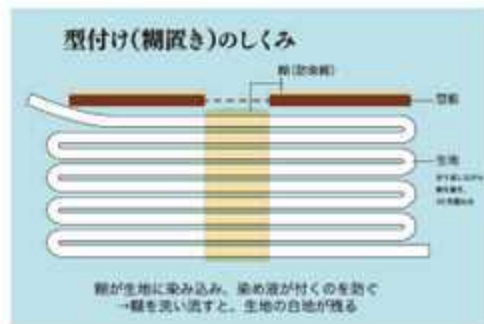


④



糊を置いたら木枠を上げて、さらに白生地を折り重ねて、同じように糊を置く
(①へ戻る)。これを40回繰り返す

⑤



植物が原料の正真正銘の本藍染

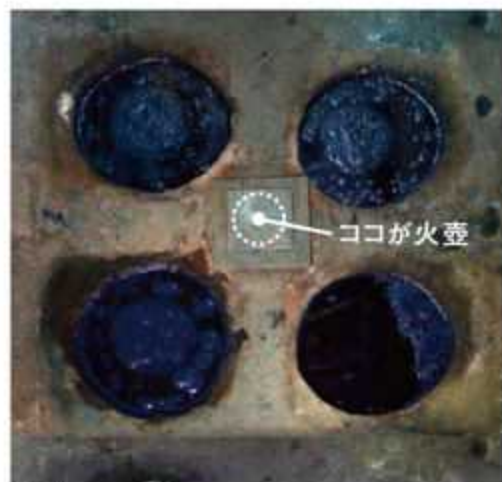
現在、ジーンズをはじめ藍染と称するほとんどが、石炭などを原料とする化学藍で染められている。しかしながら松原染織工房で使われるのは正真正銘の藍。江戸時代と変わらず、植物の藍草を原料に、時間をかけ藍菌を発酵させ、染め液を作っている。染色の作業場となるのが土間に作られたこの瓶場である。

◎藍建て

瓶場には深さ1mほどの瓶が4本一組で土中に埋められている。この瓶に、藍の葉でできたすくも藍と水を入れ発酵させ、毎日攪拌し、染め液を作る。これを藍建てという。寒い季節は4本の瓶の中央にある火壺で大鋸屑などを燃やし、瓶を温め、藍菌の発酵をうながす。途中、石灰などを入れ、様子を見ながら、何日もかけて染め液を作る。

◎藍染のメカニズム

出来上がった染め液は、表面は紺色だが、液はきれいなべっ甲色。藍は酸化発色染料であるため、空気に触れることで、紺色に発色する。



藍瓶は直径約60cm、深さ約1m



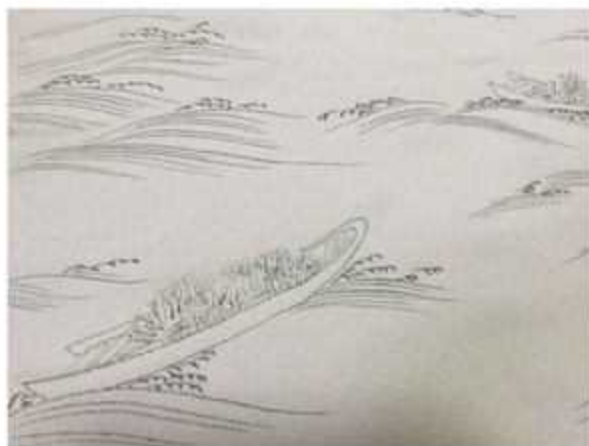
藍の染め液はべっ甲色で、空気に触れることで酸化し紺色に発色する

シルク地に絵画のように描く、手描き友禅^{ゆうぜん}

手描き友禅は、すべての工程を繊細で精密な手作業によって絵画のように描き染めていく、日本が誇る染色技法。発祥は元禄時代。下絵や糸目糊置き^{いとめくおき}など、手間暇惜しまずいくつもの工程を経ることで、色彩豊かな奥行きのある着物へと仕上がっていく。京友禅や加賀友禅などの産地とは異なり、東京では作り手が一連の工程を一人で行う。

草薙氏も同様に工程すべてを一人で行っている。庭に咲いている身近な草花やアレンジした伝統柄を題材に、やさしい温かみのある作品を生み出している。

※糸目糊置き：下絵に沿って防染の役目をする糸目糊を置くこと。細い糸のように糊をつけることから糸目糊という



手描き友禅訪問着「花びらの旋律」
2000年江戸川伝統工芸展・区長賞受賞作品



伝統を守り抜く職人氣質と
斬新で柔軟な発想力の賜物
三橋工房6代目 三橋京子



三橋工房には代々連綿と受け継がれてきた独自の図柄が2万枚あります。独特の図柄を伝統的な着物の配色にとらわれず、自由な発想力で、現代人に合う色彩感覚で染め上げて、新しい型小紋の世界の扉を開いたのが6代目である三橋京子氏です。

その原動力となったのは、厳しい修行時代に得た、伝統を受け継ぐ責任ある使命感と、持ち味である、新しい時代にも柔軟に対応できる豊かな発想力によるものです。

着物を着る楽しさを伝えたいと試行錯誤から生まれた工房の図柄が存分に楽しめる、リバーシブルの半幅帯、歴史ある意匠を身近に感じられる上品な和小物などを創作し、伝統の意匠を新しい形で現代によみがえらせています。「お客様に長く愛され、楽しんでいただける作品を創り続けていきたい。」という思いを胸に創作活動を続けております。



昭和21年(1946年)東京深川に生まれる。
昭和43年(1968年)に三橋染工場に嫁ぎ、
5代目三橋栄三の下、修行を始める。
平成2年(1990年)に6代目を継承して、
現在の三橋工房、と名を改める。伝統的
手法を守りつつ現代人に見合う色彩に染
め上げた、新しい型小紋の形を日々追求
している。

- ◆江戸川区伝統工芸保存会会員
- ◆江戸川区無形文化財認定
- ◆東京都マイスター(東京都優秀技能者知事賞受賞)
- ◆江戸川区文化功績賞受賞



歴史に裏打ちされた伝統の技術と 現代カラーとの融合から生まれた 〈新しい型小紋〉の世界



江戸時代寛政年間に創設された三橋工房は、伊勢型紙を使った伝統的な型染めの技法を継承する工房になります。

工房の始まりは、今から200年以上前に本所緑町に初代の松本屋金太郎が長板中型の板場を興したのがきっかけです。長板中型とは、表裏一体になるように布地の両面に同じ柄を染める高度な型染めの技法です。

その後5代目の三橋栄三が戦後江戸川区に移り、三橋染工場を構えました。そこで沖縄紅型を関東風に渋好みにした「江戸紅型」の技法に加え、工房に代々伝わる独特な図柄をいかした三橋工房の特有の「型小紋」を作りあげていきました。

6代目を継いだ三橋京子は、現在の三橋工房と名を改め、工房独特の「型小紋」を継承しつつ、現代人に好まれる色彩感覚で染め上げた新しい型小紋の世界を日々追求しています。



「生涯現役！ 手拭い一筋、70年」

むらい よねすけ
村井米扶

12歳から修業し、16歳ですでに一人前の職人になっていました。学校に通えないほど厳しく仕込まれました。

20歳で家業を継いだ時は、染工場として特長がなければ存続できないと、東京本染の手拭いに絞って仕事を受けるようにしました。難しい図案も、手間のかかるぼかしも、「村井ならできる！」と信頼してもらえよう、工夫して染めてきました。美空ひばりや大物歌舞伎役者の手拭いも作ってきましたよ。

東京本染はすべてが手作業で、一枚一枚微妙な違いが出るのが味わいです。時代とともに好まれる色や柄も違うから、職人はいつまでたっても勉強です。



先代が神田の染工場から独立し、昭和11(1936)年に村井染工場を創業。昭和14(1939)年に江戸川区の一之江境川沿いに移転。昭和11(1936)年生まれの本米氏は、先代の早世により、昭和32(1957)年に二代目を継承。平成2(1990)年東京都伝統工芸士に認定。三代目の光寿氏も平成18(2006)年東京都伝統工芸士に認定されている。



手拭いで半纏！
折り進めると半纏になる、
職人の遊び心あふれる手拭い。
村井米扶氏が20歳の頃、考案。

遊び心がきいた洒落た挨拶状～ 「東京本染」[※]の手拭い

村井染工場は、注染の技法を用いた東京本染の工房。注染は明治時代に始まった技法で、折り重ねた布に染料を注ぎ、布の表から裏まで一気に染料を通すことで、効率よく反物を染められるのが特長である。

表裏両面にくっきりと模様が出る手拭いには、機械プリントにはない重厚感がある。地の部分が白い「総型」や逆の「地染」、「ぼかし染」、複雑なデザインを可能にする「細川染」など、注染は多彩な表現が得意で、何色にでも染められる。

村井染工場では現在若手を含め10数名の職人が、日々さまざまな手拭いづくりに奮闘中である。

※東京本染・注染の中でも高級品として定義している、関東地方で染められる浴衣や手拭いのこと。東京都指定伝統工芸品

手拭いの由来

本来は神事の装身具だった手拭いが、銭湯の広がりとともに普及したのは江戸時代。汗を拭く、顔に擦るなど、旅先でも重宝した手拭いは、染色技術の発展により柄も色も多彩になる。昭和以降は新年の挨拶や開店祝い、催事の記念品として、その用途を拡大している。

総型



地染



「古代柄は、藍一色でも 表情に厚みがあるでしょ！」

たかはし えいいち
高橋 榮一

父が、その美しさに心を打たれ、10代の頃からコツコツ収集していたのが古代柄の型紙です。

染色が難しいこの古代柄を、長年の研究でキレイに染められるよう染料から工夫しました。長板中形ですが、片面への型染めで両面に鮮明な模様を出せるよう新技法を開発し、東京都優秀技能者(東京マイスター)の表彰も受けました。

いいでしょ!藍の一色でも、模様が複雑で表情に厚みがあります。中には細か過ぎて、二度とやりたくない型もありますが、流行に関係なく、どの年代の方にも似合うから、お母様用に、ご主人用にと、何反も購入する方がいます。嬉しいですね。ただ目いっぱい働いたから、そろそろ仕事はゆっくりと、技術を覚えたい方のために指導する時間も作りたいですね。



昭和 23 (1948) 年生まれ。大学卒業後、株式会社高常に入社、昭和 53 (1978) 年社長就任。平成 18 (2006) 年、江戸川区伝統工芸展覧会長賞受賞。平成 20 (2008) 年、第 4 回東京都伝統的工芸品チャレンジ大賞・都知事賞受賞、平成 21 (2009) 年、第 5 回東京都伝統的工芸品チャレンジ大賞・奨励賞受賞。平成 27 (2015) 年、東京都優秀技能者(東京マイスター)知事賞受賞。平成 28 (2016) 年、卓越した技能者(通称「現代の名工」)に選出。

「直線は素っ裸！ だから一番難しい」

あおき ひろゆき
青木裕之

染工場せんこうじょうの多い江戸川区だから続いているんです。完全なる地元密着型の商売です。私が子どもの頃は暮らしが厳しい時期もありましたが、今でもありがたいことに注文が途絶えません。

最近は一見すると手拭いには向いてなさそうなポップな柄が多いですね。驚くほどいろんなデザインがあって、中には面倒なものもあります。

でも型紙で一番難しいのは縞模様しまです。直線なんて簡単と思われがちですが、1本1本太さを均等に、間隔も均等に彫るのは至難の業。直線は素っ裸で、誤魔化しようがないんです。うまくいっても誰も褒めてくれないんですけどね。



精緻に彫られた縞の型紙
(昭和初期・青木型紙店所蔵)



昭和28(1953)年、江戸川区生まれ。大学卒業後、編集会社を経て、20代後半より家業の青木型紙店を手伝い、型紙職人となる。

青木型紙店

終戦後の昭和21(1946)年、戦争から復員した故・青木松太郎氏が家業を継ぎ、江戸川区松島に開いたのが青木型紙店。その後、息子の裕之氏が型紙職人として加わった工房は、染工場の多い江戸川区にとって欠かせない存在となった。

手拭い用、浴衣用、半纏用の型紙が主。特に秋口は、年末年始の挨拶用に注文が増える手拭いの型紙づくりに多忙を極める。

江戸川区伝統工芸展区長賞を3回受賞し、江戸川区指定無形文化財に認定された松太郎氏は、米寿を迎える頃まで小刀を握ったという。工房を任された裕之氏も「速くて上手い！」看板を受け継ぎ、日々研鑽を重ねている。



丹精込めて染め上げる、絆深める印半纏かんせい、絆深める印半纏あずな しるしはびんてん

江戸時代の花形職業である火消しあずなといえば、印半纏あずな。い組、ろ組、は組と、組ごとにデザインや模様が異なる揃いの半纏あずなは、火消しの誇りであり、仲間意識を育むものであった。近年までとび職や大工、植木屋など、職人が着る作業着としても広く着用されていた印半纏あずなは、今でも祭りまつりで着られる日本ならではの衣装である。

そんな印半纏あずなや酒屋の前掛けまへかけを得意としているのが畜藤染色。平井で先々代が始めた藍染屋が、現在の東松本に移ってきたのは昭和35(1960)年。以来、当時と変わらず、職人の手と技で染められる印半纏あずなには、どこか暖かい風合いが感じられる。



印半纏とは…

江戸時代、一般庶民に着用を禁止された羽織はおりにかわって、襟を折り返さない半纏あずなが庶民に普及し、その後、屋号や家紋を染めた印半纏あずなが誕生した。一目瞭然、どこの者かがわかる印半纏あずなは、絆を深めるユニフォームとして発展した。

江戸消防記念会の火消し半纏、左より三番組、一番組、日本橋消防署
図説「しるしはびんてん」 朝倉堂出版より転載

藍染 印半纏

インディゴ染め

斎藤染色

斎藤福次
Salto Fukuji



本藍染 長板中形

松原染織工房



松原与七
Matubara Yeshichi



松原孝司
Matubara Takashi



松原忠
Matubara Tadashi

せんしょく 松原染織工房の創始者

ながいたちゅうがた 「長板中形」の人間国宝・まつばらさだきち 氏

松原定吉氏が生まれたのは明治 26 (1893) 年。10 歳の時に郷里である富山県から上京し、長板中形^{*}の型付け技術を身につける。大正 4 (1915) 年に独立し工房を開く。関東大震災の影響から震災直後の大正 13 (1924) 年に、江戸川区の現在の地に移転。

定吉氏は当時分業化が進んでいた長板中形の一貫作業に挑み、優れた技術を体得。昭和 27 (1952) 年、長板中形が無形文化財に指定され、第 1 回日本伝統工芸展で優秀者に選出された。昭和 30 (1955) 年、定吉氏は長板中形の技術保持者として重要無形文化財に認定され、人間国宝となったが、同年脳出血のため 62 歳でこの世を去る。

定吉氏が残した長板中形の技術は、息子の与七氏、孫の孝司氏、忠氏に現在も受け継がれている。



松原定吉氏 (江戸川区郷土資料室より)

^{*}長板中形：長い板に生地を張り、これに型紙を置いて糊で型付けし、藍の染め液に浸して染める伝統染色工芸。中形とは小紋よりも大柄の模様のこと。



川を泳ぎ、青空にはためく反物は、 我らがふるさとの原風景

大正 12 (1923) 年の関東大震災後、江戸川区にはさまざまな工場が移ってきた。昭和 7 (1932) 年に江戸川区となった 7 町村の総工場数は 107。化学工場の次に多かったのが 23 の染織工場であった。中川や小松川境川及び一之江境川沿いには、明治時代に考案された注染という染色方法を用いた染工場が点在し、小規模ながら地場産業のひとつになっていた。反物の糊を落とす川晒しや干し場に幾重にも吊り下げられた反物は、かつて江戸川区でよく見られる風景であった。



水がきれいな中川などの川沿いには、染織工場の仕事場があった。
昭和 32 年頃



新川と交差する中川の水門上流での水流作業。昭和 20 年代



現在の村井染工場近く、自然な姿を残していた一之江境川。昭和 16 年



村井染工場の染色作業の様子。やかんで染料を注ぐ。
昭和 50 年代



余分な染料などを洗い落としたり布地を平し場で乾燥させる様子。
昭和 50 年代



糊かした西糊を巻き取り、シワを取る作業。その後、切りそろえ入ると完成。
昭和 50 年代

展示日程



第1期

1/14 (土) ▶ 2/12 (日)

ほんあいでめ
～本藍染の世界～

松原染織工房：松原与七さん、松原孝司さん、松原忠さん

つな しるしばんてん
～藍が繋ぐ結束力・印半纏～

斎藤染色：印半纏（インディゴ染め）斎藤福次さん



第2期

2/14 (火) ▶ 3/16 (木)

いさ
～現代によみがえる江戸の粋～

江戸ゆかた・高常：江戸ゆかたと古代型紙 高橋榮一さん

～遊び心がきいた洒落た挨拶状～

村井染工場：東京本染手拭い 村井米扶さん



第3期

3/18 (土) ▶ 4/16 (日)

かたこもん てど
～型小紋・手挿しに心を込めて～

三橋工房：手挿し小紋 三橋京子さん

ゆうぜん
～手描き友禅・絵画のように描く～

染色工房くさなぎ：手描き友禅 草薙恵子さん

常設展示



てわざ
～型染めを支える見事な手業～

青木型紙店：青木裕之さん